



第22回

学祖・

下田歌子展

——実践女学校と姉妹校——

ご紹介

実践女子学園の創立者である下田歌子（一八五四―一九三六）は、安政元年（一八五四）八月八日、美濃国岩村（現在の岐阜県恵那市岩村町）に、岩村藩士平尾録藏と妻、房の長女として生まれ、幼名を鉾（せき）といいました。明治三年（一八七〇）父録藏が明治政府より召し出されたことから、鉾も翌年単身上京し、明治五年（一八七二）に宮中に出仕します。和歌の才能を評価され、皇后（後の昭憲皇太后）から「歌子」の名を賜り、以後「歌子」を名乗ります。宮中を辞した後、明治十五年（一八八二）に私塾、桃天学校を創設し、政府高官たちの妻や娘たちの教育にあたりました。明治十八年（一八八五）に皇后の命により華族女学校が開設されると幹事兼教授に任ぜられ、翌年には華族女学校学監に就任しました。

明治二十六年から二十八年（一八九三―一八九五）に欧米八カ国を視察した下田は、国家興隆の基盤は女子教育にあると考え、殊に一般の女性たちの地位向上と生活改善を図ることが必要であると、明治三十一年（一八九八）、帝国婦人協会を設立しました。そしてその教育部門として明治三十二年（一八九九）五月に現在の千代田区麹町一丁目に実践女学校および女子工芸学校を開設しました。入学者が多く校舎が手狭になったため、皇室の御料地であった渋谷常盤松町を借用し、新校舎を建設し、明治三十六年（一九〇三）四月、現在の実践女子学園中学校・高等学校の所在地へと移転しました。

第二十二回学祖・下田歌子展では、実践女学校の設立から発展、そして今年からちょうど百年前にあたる関東大震災の前後の実践女学校に関する資料を展示し、下田が関わった姉妹校についても取り上げます。

二〇二三年四月

実践女子大学香雪記念資料館

第一章 実践女学校

下田歌子は、明治二十六年（一八九三）九月から二十八年八月まで欧米八カ国を回り、つぶさに女子の家庭教育、学校教育について視察しました。また、欧米から日本を見ることによって、ヨーロッパに対するアジアの危機を痛感しました。国家の興隆の基礎は女子教育にある。殊に一般婦女子の地位向上と生活改善を図ることが重要との認識を持ち、帰朝後の明治三十一年十一月、帝国婦人協会を設立しました。その組織の教育部門として明治三十二年五月に実践女学校ならびに女子工芸学校が麹町区元園町に開校されました。明治三十六年には、豊多摩郡渋谷村常盤松の旧御料地（現在の渋谷校地）を恩借し、移転しました。その教育理念は、人間作りの基盤をなす家庭の意義と、社会の構成員としての女子の自覚にあったといわれています。

No. 1

「実践女学校開校式の時」

「明治三十二年（一八九九）」
一枚
二七・六×二一・二cm
出納番号：2765



No. 3

「帝国婦人協会設立主意書」

下田歌子
明治三十一年（一八九八）
一冊
三一・九×二一・三cm
出納番号：4800

この協会設立の主旨を全国の志を同じくする人々に呼びかけ、賛同者を増やしていくことを目的とし、設立の翌月には、規約原案が起草され、本部事務所が麹町区元園町（現在の千代田区一番町三丁目）に

「凡例」

・本パンフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した企画展第22回「学祖・下田歌子展―実践女学校と姉妹校―」（二〇二三年四月三日～五月十二日）に際し、発行したものです。
・本展は、元実践女子大学香雪記念資料館専門委員会・大塚宏昌委員（元実践女子大学図書館部長）が企画したものです。
・本パンフレットには、展覧会に出品された資料のうち、主要なものを掲載しています。
・本パンフレットの編集は宮崎法子（香雪記念資料館前館長、田所泰（同学会員）が担当し、鈴木美有、河本理緒、矢野綾香が補助しました。
・資料解説の執筆は、大塚宏昌（〇）と田所泰（△）が行いました。また、章解説は大塚が、ポイント解説は田所が執筆し、資料の翻刻は大塚（No. 19、20、35）と田所（No. 8、35、40）が行いました。
・資料の基本情報における仮名および推定事項は、「△」で示しました。
・資料の寸法は今回の展示に際し、改めて採寸したものです。
・掲載している資料はすべて、実践女子大学図書館の所蔵です。また、出納番号は実践女子大学図書館「下田歌子データベース」(<https://opac.jissen.ac.jp/repo/repository/shimoda/?lang=en>)に対応しています。

「資料翻刻要領」

・原本における見せ消し、抹消、誤字の上からの正しい字の重ね書き、また脱字の書き込み等は、その訂正後の形を採用しました。
・難読あるいは破損等で判読できない箇所は、推定字数分の□を以て代え、またそれが何字分となるか不明のものは、「△」で示しました。なお、破損の場合には、その字の右側に（破損）と注記を施しました。
・翻刻した字に疑問の残る場合には、その右側に（カ）と注記を施しました。
・誤って記したと思われるものについては、その右側に正しいと思われる字を（ ）に入れて注記しました。
・原本における改行は、適宜「」で置き換えました。
・翻刻文中には一部、今日に照らして不適切と思われる表現が含まれますが、原典の時代性に鑑み、原文のままとしました。

「表紙画像」

「実践女学校創立十周年記念式典」（部分）明治四十二年（一九〇九）
（とさわる色も深めて…）（部分）「明治四十一年（一九〇八）」

置かれ、その実現に向けて、事業内容が練り上げられました。（〇）

No. 4

「帝国婦人協会事業の概要」

下田歌子
「明治四十年（一九〇七）」
一冊
二七・七×一九・五cm
出納番号：0073

事業内容は、教育門、文学出版などの文学門、勸工場などの商業門、慈善女子病院、看護婦養成所などの救恤門の五門の壮大なものでした。（〇）

No. 6
帝國婦人協會教育門所轄學校規則

附 寄宿舎規則

帝國婦人協會
明治三十二年（一八九九）
一冊
二二・五×一五・一 cm
出納番号：12521

本資料は帝國婦人協會が開設した実践女学校と付属慈善女学校、および女子工芸学校と付属下婢養成所の四校に関する規則と、寄宿舎に関する規則を記したものです。慈善女学校の総則第二条には、「本校は孤獨貧困なる女子を教育して之に自活の道を授くる所とす」とあり、下田が恵まれない階層の女子へも、広く教育を行おうとしていたことが知られます。（T）

No. 7
名譽會員名簿 第七号

〔帝國婦人協會〕
「明治三十一年（一八九八）」
一冊
三一・九×二二・七 cm
出納番号：2801

寄付者には、渋沢栄一（一八四〇—一九三一）など政財界のほか、仏教関係者など幅広い著名人が名を連ねています。（O）

No. 12

短冊帖

（下田校長の従三位をことほぎまつりて）

実践女学校生徒有志
明治四十一年（一九〇八）
一帖
三九・五×一八・四 cm
出納番号：1186

明治四十一年（一九〇八）従三位に昇勲されたお祝いとして、生徒が和歌を詠んで、短冊帖として贈ったものです。（O）

No. 13

実践女学校創立十周年記念式典

明治四十二年（一九〇九）
一枚
一〇・四×一四・八 cm
出納番号：2791

下田歌子は、明治四十年（一九〇七）暮れに、華族女学校（学習院女子部）の職を辞し、実践女学校の教育に専念します。明治四十一年（一九〇八）四月には、実践女学校附属幼稚園を設立し、翌年、創立十周年の記念式典が挙行されました。（O）

No. 8

渋沢栄一書簡 下田歌子宛

渋沢栄一（一八四〇—一九三一）
「明治三十一年（一八九八）」
一通
二二・四×三〇・一 cm
出納番号：0723

渋沢栄一が下田歌子へ宛てて出した手紙です。帝國婦人協会への加盟依頼を受け、その仲間に加わったこと、また年内は日もなく難しいので、春ごろに会いたい旨が綴られています。（T）

〔翻刻〕
華翰拝見申候然らば帝國婦人協會御設立以／來容易ならざる御盡力にて追々其事務も御取／運相成候由邦家の為御勤勞の段拝謝の至に候／就て小生にも御加盟の事先頃來貴价を以て御／申越に付寸志まで御仲間入いたし候儀に候又其中拝眉の儀は從是も相願候へ共年内は餘／日も無之候に付御都合次第春に相成候後に相／願度候只折角教育事務に付ては何卒不相替御／精勵の程願上候右拝復旁一書得貴意候

十二月十五日 澁澤 栄一 勿々不備
下田歌子様

No. 9
初期の校服を着用した生徒

大正四年（一九一五）
一冊
八・八×五・八 cm
出納番号：1264

No. 14

実践女学校創立十周年記念絵葉書

帝國婦人協会
明治四十二年（一九〇九）
一枚
一四・〇×九・〇 cm
出納番号：1040



桜紋をあしらった紅白の幕を懸け、青々と葉を繁らせた松の木の下で、下田歌子が詠んだ祝歌「はや十かへりの春をへし 柳桜の花のその からもやまともこきませて 織れや心のあや錦」を掲げ持つ女学生が描かれます。松の木と紅白の幕に表された桜紋にはエンボス加工が施され、桜紋の上には紫色のインクで、「實踐女學校十週年紀念 42 327」と記された桜花形の記念スタンプが捺されています。この絵葉書を作成した校同窓会の臨時会計報告書によれば、「絵葉書代及スタンプ並二原板料」が金四〇四円二十五銭で、売り上げ金額は金二二〇円七十三銭だったといえます。この女学生が着ている灰色の着物は、当時の実践女学校の制服です。

【参考文献】
『実践女子学園一〇〇年史』（実践女子学園、平成十三年三月）

台紙の裏面に、「川幡清子 大正四年四月高女一年に入学」とペンで記されており、その頃に撮影されたものと考えられます。実践女学校では開校当初から制服を導入しており、大正十二年（一九二三）に制服が改定されるまで、本資料に見られるような授業服が用いられていました。この授業服は、在校生が毎年新入生のために、縫って贈るという慣習がありました。（T）

【参考文献】
『実践女子学園一〇〇年史』（実践女子学園、平成十三年三月）

No. 11

ときはなる色も深めて…

下田歌子
「明治四十一年（一九〇八）」
絹本墨書
一面
三三・三×九九・一 cm
出納番号：3005

明治四十一年（一九〇八）四月に従三位となり、同年九月に実践女学校を財団法人としました。和歌に位階を入れることがなかったことから、同年に書かれたものと推定されます。生徒を姫松にたとえて、日本女性が、ことくさ（外国）に負けないくらい活躍してほしいとの願いを込めた歌になっています。（O）

No. 16

日英博覧会提出書類草稿

実践女学校
明治四十二年（一九〇九）
一式
出納番号：0593

日英博覧会は、明治四十三年（一九一〇）五月十四日～十月二十九日の期間、ロンドンで開催されました。会期中の入場者は六〇〇万人にのぼり、盛会のうちに閉会しました。絵画、彫刻、工芸関係などの美術品から、絹製品、刺繍などの繊維製品、紙、印刷など日本の技術の粋を集めたものが数多く出品されています。本資料は本学生徒の製作物が出品された際の提出書類です。（O）

No. 17

日英博覧会出品に関する文書

日英博覧会事務局
明治四十二年（一九〇九）
一式
出納番号：0594

『日英博覧会受賞人名録』（日英博覧会事務局編、明治四十三年）によると、実践女学校は、婦人部 教育部門で、女子英学塾（後の津田塾大学）などと並んで、金賞を受賞しています。（O）

第二章 関東大震災での実践女学校

大正十二年（一九二三）九月一日に発生した関東大震災では、下田歌子は愛国婦人会会長として被災対応にあたりました。「震災臨時救護班」を組織し、地方各支部へ救護金品の募集を打電、本部事務所を開放して、罹災者を収容するとともに、医療活動、周辺住民への炊き出しなどを行っています。

実践女学校は奇跡的にも関東大震災の被害がほとんどなかったのですが、教職員、生徒の一部には家が焼失したり、死亡したりしたのもおり、その亡くなった生徒三名に対し、十一月一日校庭にて慰霊祭が執行されました。また、震災時のエピソードとして、校舎が焼失した大妻高等女学校から本校への教室借用依頼を快く承諾し、九月二十五日に移転してきたことが、『なよ竹』十二号に記載されています。同日に本校の授業も再開されました。

No. 18

震災に就きての注意と覚悟

下田歌子

大正十二年（一九二三）

一冊

二六・四×一八・六 cm

出納番号：0172

地震の場合は、動揺せずに状況を見ながら沈着に行動する。火が燃え移らない軽い籠を背負い、事前に決めている場所に避難するなど、具体的な話を、江戸時代やイギリスの例を交えながら講演しています。

（〇）

ここがポイント

大正十二年（一九二三）九月一日に発生した関東大震災とそれに伴う火災を、下田歌子は「天の譴責」すなわち近代化による科学の発展や知識の進歩により、自分たちは利口だと思いあがった人間に対する戒めだと説きました。そして多くの人が万能だと思い込んでいた科学は今回の地震を予知できず、自らの愚かさに目をつぶっていた人々は、当然すべき注意を怠っていたと指摘します。昔は新しく家を建てたり、引越したりした際に、真っ先に地震や火事があったときの避難経路について考えていたのに、今の人はそうしたことを考えず、また江戸の家々にはそれぞれ天水桶という防火用水の準備があったのに、これも無くなってしまう。さらには水道がまだ不完全であるにもかかわらず、井戸を埋めてしまったがために飲み水が不足した…。下田はこのほかにもさまざまな例を挙げ、「それが分つたら、今度はしつかりして、うんと覚悟をしなければならぬ、それを昔の人は馬鹿だ等と思つて、馬鹿にしたから、今日こんな酷い目に遭つたのです。だから注意丈はしなければならぬ」と訴えています。

No. 19

下田歌子差出書簡 床次竹二郎宛

下田歌子

大正十二年（一九二三）九月二十日付

一卷

書簡：一八・六×七七・〇 cm

封筒：一八・六×一六・八 cm

出納番号：4589

床次竹二郎は、大正十二年（一九二三）九月に発足した官民合同の「震災救護会」の委員となっており、また実践女学校拡張後援会の顧問にも就任している関係で、下田歌子とは親しい関係でした。そのため実践女学校の罹災状況について、下田校長名で出されたと考えられます。（〇）

【翻刻】

謹啓今回之大震災火災ニ付／御被害候事と痛心ニ不堪／早速御見舞申上度と焦り／候へども交通杜絶加之に／本校職員にも数名之／罹災者有之生徒の罹／災はまだ全部之調査／つきかね候へども少数死者も／有之候由ニ心外之御無沙／汰不本意此のことニ御座候／其後引続き諸事／混乱之折柄遅延之情／御海容被下度候尚當校／の擴張後援会事務所ハ／被害も少なく候間御安心／被成下度候先ハ御見舞／をかね御報のミ勿々敬具

大正十二年九月廿日

実践女学校長下田歌子

床次竹二郎殿

〔封筒裏〕

麻布区三河臺町一四

床次竹二郎殿

〔封筒裏〕

下澁谷

実践女学校長下田歌子

No. 20

三善千代子書簡 坂寄美都子宛

三善千代子

大正十二年（一九二三）十月七日付

一通

本紙：一八・四×一三・〇・二 cm

封筒：一九・七×七・七 cm

出納番号：0922

関東大震災直後の下田歌子の救恤活動についての所感、日光の御用邸に滞在中の天皇、皇后の震災被災者へのご心痛、東京の皇室内での救済活動の様子

を女官の立場から書き送っています。最後に、実践

の同窓生の安否確認にもふれています。三善千代子は、貞明皇后付きの女官（権命婦）として務め、昭和三年（一九二八）には皇太后付として、命婦に昇進しています。また、坂寄美都子は、清国留学生部の舎監を務め、長く実践女学校で教鞭をとっています。（〇）

【翻刻】

時下俄に秋冷相加はり申候處／美都子様には何の御障りも／おはしますす候御事何よりの／御事と／御よろこひ申上候さてこの度の／大震災大火災は実に前古未／曾有の事にて其惨状承つる／たに／物すくおそろしく誠に痛心の／極に御座候／而陛下摂政宮殿下各皇子殿下には／何等御異状あらせられす候御事／誠に有難き御事ニ御座候／さりながら／皇族様かたこの震災の為薨去／被遊候御事何とも申上様も御座なく／恐懼の至りに御座候／御前様御邸宅は以前は神田ニ／あらせられ候やう記憶致し居候が／この度御罹災如何なりしかと／御案し申上ながら御無沙た申上／御ゆるし願上候過日ハ／下田先生へ御ことつけ頂き新聞／御廻し戴き有難くこの度は／愛国婦人會にても日夜一方ならぬ／御奮闘のよしかねて新聞其他にて／うけたまはり誠に有難き事と／存し御健全とハ申せ先生にハ／何分御老体の御事一層御案し申上候處／過日／后皇陛下還御の節御参内の折も／なか／御元氣に御座候ひし由／当地へ行啓後親しく伺ひ誠ニ／心強くおほえ申候と、もにいつもながら／の御努力感佩の至りに御座候／実践女学校にても婦人會よりの／寄贈の／衣服裁縫のため非常の／御多忙ニ／在し候よし誠に／苦勞様なる／御事と／存し上候宮城にても御留守の人々ハ／出来得るかきり裁縫も致され私共ハ／何分供奉中の事心ならずも／留守の家来ニ／申付候事ニ御座候愛国婦人會か／近來目立ちて評判よろしく／全く下田先生の御就任の結果と／存し実に／嬉しく有難く／私共まで／肩身廣きやう存しられ申候／擬昼夜御多忙御安らかに御ねふりも／遊はしかね候御中おそれ入候へとも／同級の

〔封筒表〕

東京府豊多摩郡渋谷町

実践女学校内

坂寄美都子様

御直披

〔消印〕

日□□107□□・□

〔封筒裏〕

栃木縣日光田母沢

封 十月七日 御用邸

にて 三善千代子

第三章 実践女学校の飛躍

震災の前年、下田歌子は女子教育の最高機関として女子大学設立を考えていました。昭和三年（一九二八）十一月の『開校三十年記念式における下田校長講演』によれば、「大正十一年の春、清浦子爵、水野氏、床次氏などの賛助を得て、将来わが校を大学にしようと、大胆な計画を発表したのであります。だいぶ寄附金募集にも着手致しました。ところがたまたま大正十二年、関東大震災という大打撃に直面してしまいました。（略）一旦発表した以上無理でもなんでも、狹隘にして且つ不完全な校舎を、立派なものに改めなければなりません。」このように述べ、校舎の新設と、大正十四年（一九二五）、専門学部の開設を試みるのです。

No. 21

財団法人私立帝國婦人協會實踐女學校

拡張後援會寄附金芳名

櫻同窓會

「大正十三年（一九二四）」

一冊

二一・九×一四・八cm

出納番号：0592

大正十一年（一九二二）に、下田歌子は、大学令による女子大学昇格の構想を打ち出します。下田歌子は、『財団法人帝國婦人協會実践女学校大学部・専門学部設立趣意書』の中で「本邦婦人の最高学府を開いて、単に若き女性の知識欲を満足させるのみではありませぬ。精神教育の基礎の上に高等なる専門教育を施し、其の品性才能を高め、時代に適応した婦人を養成し、以て欧米婦人にも歩を譲らぬ迄に

至らしめたい」と述べています。そして、寄付金募集にも着手しますが、関東大震災により、女子大学構想は頓挫します。しかし、その後も学校拡張計画は推進され、設備面では、大正十三年（一九二四）

二月には実科高等女学校の校舎、鉄筋四階建ての新校舎が建設されました。拡張後援会会長には、蜂須賀正韶侯爵、顧問に清浦奎吾、渋沢栄一、床次竹次郎、大養毅などの政財界の名士が名を連ねています。

（〇）

No. 22

寄付金領収証

実践女学校拡張部後援会

大正十二年（一九二三）／十三年（一九二四）

五枚綴り

十四・二×十五・五cm

出納番号：0266

No. 26

「竹の若葉」序

下田歌子

昭和二年（一九二七）

七枚綴り

二一・一×一四・九cm

出納番号：0238

『竹の若葉』の「はしがき」および「凡例」の草稿です。（〇）

No. 27

竹の若葉

実践女学校文学部編輯

昭和二年（一九二七）

一冊

二三・〇×一五・五cm

出納番号：911.16/54

大正八年（一九一九）十一月より昭和二年（一九二七）十月までの歌会秀作選です。（〇）

下田歌子は、二年にわたり、総額二五二〇円の寄付をしています。（〇）

No. 23

第一鉄筋校舎落成記念絵葉書

大正十五年（一九二六）

六枚組

九・三×十四・三cm

出納番号：3015

大正十四年（一九二五）一月、下田歌子が目指した高等教育機関として専門学部が開校します。専門学部には、国文科、英文科、家政科、技芸科を設置しました。その翌年に、第一鉄筋校舎が完成し、その落成記念の絵葉書です。（〇）

No. 28

競点の巻

下田歌子

昭和十一年（一九三六）

一冊

二八・〇×二〇・四cm

出納番号：2560

朱筆で巻末に総合評価を記しています。文末には、「昭和十一年八月十日 病点者 左手にて記す」とあり、下田歌子は手術後、右手が不自由になり、左手で書いています。同年十月八日に逝去されているため、最晩年の詠草添削です。（〇）

No. 29

短冊帖 校長の君の古希を祝ひまつりて

実践女学校生徒有志

大正十二年（一九二三）

各一冊

No. 29 三九・二×一八・二cm

No. 30 三九・四×一八・三cm

No. 31 三九・四×一八・二cm

出納番号：1361～1363

これら三冊の短冊帖は、下田歌子七十歳の古希の祝いに生徒有志が和歌を詠んで、短冊帖として贈ったものです。（〇）

No. 24

実践女学校旧校歌楽譜

下田歌子 作詞

澤田孝一（一八八二―一九三二）作曲

明治時代後期～昭和時代初期

一冊

二七・六×二〇・二cm

出納番号：0687

実践女学校の校歌は、開校から五年後の明治三十七年（一九〇四）に制定されました。歌詞は下田歌子がつけ、作曲は当時、東京音楽学校（現、東京藝術大学音楽学部）を卒業したばかりだった澤田孝一が担当しています。当初の校歌は本資料にあるように、「千代のときはの松かげに ひらく学びの窓の竹 君が恵の露うけて しげれ操の色深く」という歌詞でしたが、昭和七年（一九三二）十一月に現在の「ときはの松の下かげに 開くをしへのには桜 君がめぐみの露浴びて にほへやしまの外までも」に改詩され、それに合わせて若干の改曲が行われました。この改定は、旧校歌の「良妻賢母調を一変させ、広く海外へ視野を拡げたものであった」（『実践女子学園一〇〇年史』）とされています。（T）

【参考文献】

久保貴子「下田歌子と音楽教育」（『実践女子大学下田歌

子記念女性総合研究所年報』第六号、令和二年三月）

越山沙千子「実践女子学園 校歌に関する研究」（『実践

女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報』第六号、

令和二年三月）

第四章 実践女学校の姉妹校

淡海女子実務学校

淡海女子実務学校は、大正八年（一九一九）塚本さと子によって滋賀県神崎郡北五箇荘村に設立されました。校長塚本さと子、校主塚本源三郎、顧問は杉浦重剛、下田歌子、嘉悦孝子です。大正十四年に塚本さと子が高齢のため、下田歌子が校長となり、校名を淡海実践女学校と改称しますが、翌大正十五年には高等女学校に昇格して、淡海高等女学校と改めています。下田は昭和五年（一九三〇）七月まで校長を務めました。戦後、昭和二十三年四月に淡海高等家政学校となり、昭和四十三年に五十周年を迎えましたが、昭和六十年に閉校しました。

しもだうた子

塚本／さと子様へと

〔別紙〕
あまりの事ニきちかいかとの御うたがいも／あるか知れませんがひでハありませ／ん今ハ世ニ亡き父なれど失敗／の為メ 此の身をはちて涙をのミて有る／者ニ御座います どうぞおわらい下さい／ますな

〔二匿名女子書簡封筒表〕

縣下神寄郡南五個荘村

大字川並

塚本源三郎様 御内

々御令母堂様江

〔消印〕

滋賀・石塚 8.13 后36

〔封筒裏〕

メ 一月廿三日

おなじき村ニ在る

志津が 女 より

〔下田歌子書簡封筒表〕

近江国神埼郡竜田

淡海実務女学校

塚本さと子様へ

御返事

〔消印〕

青山 9.421 前10-□

滋賀・石山 9.424 □0.9

〔封筒裏〕

メ 東京青山北六

下田歌子

四月廿日

No. 35

塚本さと子宛書簡

一匿名女子

下田歌子

大正八年（一九一九）一月二十三日付

大正九年（一九二〇）四月二十日付

一卷

一匿名女子書簡…一六・四×一四七・四 cm

封筒…一九・四×一五・三 cm

下田歌子書簡…一八・二×三一・四 cm

封筒…二〇・一×一六・一 cm

出納番号…3638

下田歌子の学校創設の講演会を聞いて感銘を受けた女性から、創設者の塚本さと子氏への寄付とともに送られた書簡です。この書簡は扁額に装丁され、長く淡海女学校の校内に掲げられていました。（〇）

〔翻刻〕

〔二匿名女子書簡〕

時節柄とて厳敷きお寒／さにも御賢婦様御玉體／ニハます
〈御すこやかに／わたらせられ候や何卒／御保養御大切に御いとひ下／され度ひたすら御願ひ申上候／斯く申上る不妾はまことに／あはれ賤けき身ながらも／其の御徳高き御賢婦／様の御心を慕ひ申上る心こそ／あさからず／御老婦様をわすれ兼ねつ、／有る者に御座候まゝ、余り／せつなる思ひのやる瀬なく／遂ニ失礼をかへり見ず、筆を呈し申上るつミハ／幾重にも御許し玉はり度候／御賢姥様ならびニ／御孝子様の御もようしに依て／近きは村民ひいてハ近江近／郷の人々其の御名も高き／ニ先生様のお話しを

No. 38

『きぬがさ会誌』第一号

淡海女子実務学校きぬがさ会編

大正十一年（一九二二）

一冊

二一・七×二五・一 cm

出納番号…1167

きぬがさ会とは、淡海女子実務学校の卒業生が組織した同窓会で、大正九年（一九二〇）八月に発足しました。会の名称は、学校近くにある織山にちなんだものです。本資料はその機関紙として、淡海女子実務学校で最初の卒業式が行われた大正十一年（一九二二）に発刊されました。卒業生へ向けての記事のほか、卒業生の消息や、在校生の近況などが掲載されています。また、口絵には塚本さと子や嘉悦孝子の墨蹟のほか、下田歌子が認めた和歌「衣笠のやまの姫松…」（No. 46）の図版が掲載されています。（一）

No. 40

山口典子宛書簡

塚本友子

昭和時代

一通

便箋…二三・〇×一七・七 cm

封筒…二〇・二×八・九 cm

出納番号…1620

承わらせ／下さいまして難有ふ御座いました／昨年二度ながら拝聴致し／まして其れから後は一人ニ／女子たる者の節操を以て／つとむるに外ならずと存じ／申候まゝ、かならずひくき／身にある不妾らの如きハ身／の分限をわすれぬ様ニ儀を／尽して其の在る家を／まゐるべくと覚悟を仕り居／申候／嗚呼 不妾が今／少し身分ある者ニ候へば／御賢姥御前ニ侍りて御目も「^{（敬請）}」／の上ニつもる御礼を申上るべけ／れと如何せんそれハ何程／思案致し候とも致し難き／今の身なれハ涙をのミて／かげながら／御賢婦様の御徳を御慕^{（敬慕）}□／申上居り候猶来る花の頃より／御開せつ被遊るべき御大望を／いだかさせられつ、おはします／御玉體何卒寒氣のお障□□／おわしまさぬ様返す／も／御いとひ下され度ねぎ入参らせ候／同封致し置きます物は／高貴のあなた様方ニかけました／お恥しきと申上るもおはずかし□／物にハあまりの事に失礼にも□／るかと種々ニ心を痛め申候な「^{（敬請）}」／ひくき身ニある不妾ニハ何とせんす「^{（敬請）}」／なく幸ひニお正月に外より私へ「^{（敬請）}」／ました物なれバ妾が心を／御慰察下されて此れ丈の物でも／下田嘉悦先生方への一べんの／御往復になりと御つかい下さ／れ候様なれバ妾の嬉び此「^{（敬請）}」／過ぎず難有き仕合せと存じ／申候
先は右失礼の／かず／幾重にも御「^{（敬請）}」／を乞ふ
村内
賤が女より

一月二十三日
塚本御老姥／さと子先生様

〔下田歌子書簡〕

御示しの村内の賤が女より／寄附の件にハ実に／感じ入候佛は富者の／万燈よりも貧者の一燈／と嘉納せられ候この無名／の女子をして感動せしめ／られ候老刀目の御満足／さこそとわれも打ち笑まれ候
早々かしこ

四月廿日

〔翻刻〕

※本資料には大塚友子による書簡と、きぬがさ会の会員についてまとめた手描きのメモが付属するが、ここでは書簡部分のみ翻刻した。

山口先生 御前に
お便りありがたう存じました。今年ハ淡海で／も学園祭に二階堂先生が／下田歌子先生展を開きたいと申ていられます。／私も生きてゐる間におむくい出来るのはと／一生懸命お手傳ひするつもりです。

前後しましたが、とりいそぎお答を／同封いたします。どうぞ十月八日には／どう／とお話下さいます様きつと／下田先生が背後で守つていて下さいます／から真心こめてお話下さいませ。私も／及ばず乍ら一生懸命お祈り申上げて／居ります。

十月八日は毎年私も感謝のおまつりを／しています。

あすから学校の行事で永源寺で座禪／がありますので（留守の事などたのま／れましたから）これから一寸学校へ行きます。

とりいそぎお返事迄 かしこ

一同 友子

〔封筒表〕

〒723

東京都目黒区五本木

二の54の13

山口典子先生 御前に

〔封筒裏〕

封

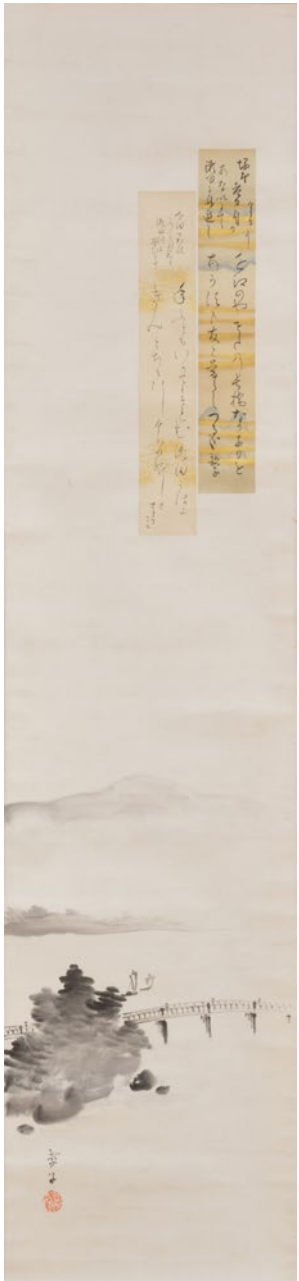
○きぬがさ会の歌道部の会員は当時二十名位あつたと思ひます。
一同 ○同窓会もきぬがさ会と申します。

○川並の背後の山を織山と云ひますのできぬがさと名づけました。

〒52914

滋賀縣神崎郡五ヶ荘町川並630

塚本友子 拝



No. 42

〔瀬田川の船遊に〕

下田歌子

塚本さと子（一八四三―一九二八）

嘉悦孝子（二八六七―一九四九）

大正十年（一九二二）

紙本墨画

一幅

一三三・五×三〇・九 cm

下田歌子短冊

「塚本老刀自かあないにて瀬田に舟遊しける日に
近江のや せたの長橋なかき日を あかすも友
と暮らしつる哉 歌子」

塚本さと子短冊

「下田嘉悦ふたりの君と瀬田川に遊びて 年ふと
も いかてわすれむ 瀬田かはに きみとあそ
ひし けふの嬉しさ さと子 七十九」

嘉悦孝子画

款記「孝子」

印章「嘉悦」白文竹型印

出納番号：3623

下田歌子、塚本さと子、嘉悦孝子の三人で瀬田川に舟遊びをした折に作られたものです。歌子とさと

子が和歌を詠じ、それに因んだ瀬田の唐橋を孝子が描いた合作の書幅です。（〇）

No. 43

題桃実図

下田歌子

塚本さと子（一八四三―一九二八）

嘉悦孝子（二八六七―一九四九）

大正時代

紙本墨画

一幅

一二三・〇×二六・四 cm

下田歌子和歌

「神崎の さとのひめ桃 三千とせの 実をむす
ふまで 生したてなむ 歌子」



No. 45

〔塚本さと子刀自への挽歌〕

下田歌子

昭和時代初期

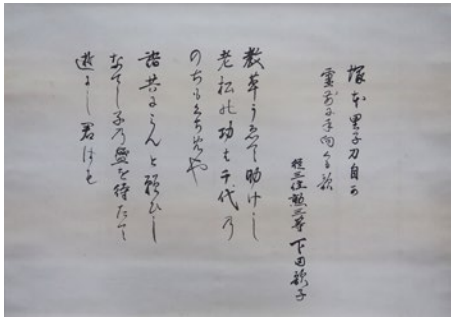
紙本墨書

一幅

三四・七×四八・九 cm

和歌「塚本里子刀自か霊前に手向くる歌 従三位
勲三等下田歌子 教草うゑて助けし老松の
功は千代ののちもくちめや 諸共にミント
願ひしなてし子の 盛を待たて逝にし君は
も」

出納番号：3632



No. 46

衣笠のやまの姫松…

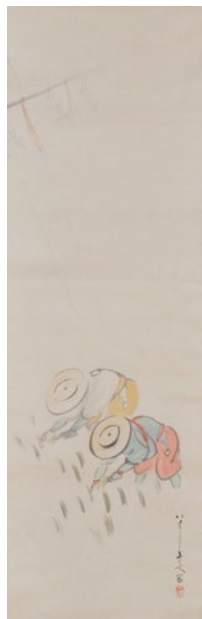
下田歌子

「大正八年（一九一九）」

絹本墨書

一幅

二九・二×三三・五 cm



No. 47

早乙女図

塚本源三郎

大正時代、昭和時代

紙本墨画淡彩

一幅

一〇三・一×三三・三 cm

出納番号：2982

塚本さと子の次男で、淡海女子実務学校の校主を務めた源三郎が描いた作品です。源三郎は八年、柿

塚本さと子和歌

「名にたかき をしへのおやを しるへにて わ
れもまなひの 道をたとらむ さと子」

嘉悦孝子画

款記「孝子」

印章「孤芳」

出納番号：3624

淡海女子実務学校の生徒を姫桃にたとえて詠んだ下田歌子の和歌に、歌子と嘉悦孝子という女子教育の先達に従い、自らもその道を進むのだという決意の滲む塚本さと子の和歌、さらに孝子が描いた桃の実が配された一幅です。表装裏には「下田嘉悦塚本三先生合作 八年什」との墨書があり、塚本さと子の次男で八年と号した塚本源三郎が所持していたものであることが知られます。また、源三郎著『紅屋二唄』（昭和十年）には、本作とおなじ内容で、和歌の配置が異なる作品の図版が掲載されており、おなじような作品が複数制作されていたことが窺えます。（T）

屋と号し、多くの文化人らと交流しました。描かれているのは田植えに勤しむふたりの女性。紙垂のついた縄が張られていることから、神事である田植祭のようすを描いたものと思われます。（T）

No. 48

法語のから歌に和して

下田歌子

塚本源三郎（一八六六―一九三九）

昭和十年（一九三五）

紙本墨書

一幅

本紙…六二・〇×二六・六 cm

歌子短冊…三五・八×六・〇 cm

「法語のから歌に和して 鬼かあらず佛かあらず
根にかへる はなをも人は散るといふらん 歌
子」

八年短冊…二五・八×九・一 cm

「凡耶將慰□ 非佛也非魔 自在逍遙處 輕鞋踏
落花 八年老人筆」

印章「□」白文方印、「柿仙」朱文長方印、

「□象□」朱文長方印・関防印

出納番号：3622

下田歌子の和歌と、塚本源三郎の漢詩が書かれた短冊を張り交ぜた一幅です。本作を収める桐箱の蓋表には、源三郎により「下田八年應酬詩題」と墨書されており、歌子と源三郎が送り合った歌を合装したものと考えられます。（T）

その他の教育事業

No. 55

女子農芸学校施設目論見書

下田歌子

〔大正五年（一九一六）〕

一冊

二四・六×一七・二cm

出納番号：0087

文末に「設立の主意書及び規則書ハ、余が欧米より帰朝せし当時、即ち殆ど二十年前よりの希望にして…」とあることから構想は、明治二十八年（一八九五）頃からあり、園芸と工業の二科を設置して、生産した農産物、水産物を乾物や缶詰にして販売する構想だったようですが、実現はしませんでした。（〇）

No. 57

校地借用契約書

下田歌子 ほか

大正五年（一九一六）

一通

本紙：二四・一×三三・三cm

封筒：二五・四×九・三cm

出納番号：1159

実践女学校理事下田歌子、女子音楽園主松山いつ、常磐松女学校校長三角寿々が連署した契約書。松山いつは、嘉永四年（一八五二）江戸麻布に幕府与力松山源左衛門の娘として生まれました。維新後、静岡藤枝に移り、明治十年（一八七七）に静岡師範学校附属小学校の教師となります。明治三十七年東京へ移り、東洋婦人会を創立します。校地借用契約書には「女子音楽園主松山いつ」とあります。『新修渋谷区史』中巻には、常磐松女学校が、「大正五年（一九一六）四月、女子音楽園の姉妹校として設立され、修業年限は四ヵ年半、松山鑑子の経営にかかる。」とあります。女子音楽園は、明治三十七年に東京音楽学校や教員検定試験の予備校としての役割を担った音楽講習所「女子秋吟会」として設立されました。明治四十四年に私立の音楽学校として認可を受けました。三角錫との関係は不明ですが、ともに常磐松女学校を設立したと考えられます。しかし翌大正六年（一九一七）に、松山いつは病没しています。（〇）

〔解説パンフレット〕

第22回 学祖・下田歌子展

—実践女学校と姉妹校—

発行日：2023年（令和5）4月3日

編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

電話：03-6450-6805

H P：https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/